20 日（火）　宇都宮功氏　（当時１５歳）

16 時 20 分～17 時 50 分

当時修道中学の３年生で、宮島にあった兵器敞の火薬庫に動員され、８月６日は宮島で原爆のキノコ雲をみた。広島の兵器敞に動員されていた学友は原爆で亡くなった者も多い。翌日家がある宇品にもどり、伯父や母親と一緒に、二部隊の兵士だった父親を探してまわり、市内の惨状を目の当たりにした。３日目に大野の小学校に収容されていた父親と再会。父親は放射能の影響で髪の毛や歯が全部抜けていた。治療をうけて一時元気になったが、その後再び具合が悪くなって原爆病院に入院し、何度も血をはいて１９６１年に原爆症でなくなった。

21 日（水）　福永英子氏　（当時１５歳）

16 時 20 分～17 時 50 分　（写真左から二人目が福永氏）

広島大学教育学部の前身である広島女子高等師範学校の第四期生で、広島大学家政学研究会の４代目会長をつとめた。直接被爆した経験はないが、千田町で被爆した広島女高師の同僚生から被爆の生々しい実態を聞かされてきた。日本で三番目の女高師として１９４５年に開校し、全国から志望した８１名は入学間もなく原爆にあい、７名の即死と全員被爆の傷痕をおって敗戦を迎えることになった。戦争の残酷と虚しさの中を生き抜いてきた彼女らの体験と平和への思いを中心に、自身が体験した上海での戦争の実態と合わせて、今の大学生に伝えたい。

22 日（木）　日高敦子氏　（当時９歳）

18 時～19 時 30 分

昭和２０年３月から始まった強制学童疎開によって千田町から県北に縁故疎開した。８月４日に広島に帰り、伯母が住んでいた南観音の家で６日に被爆。ヤケドをおい、ボロボロの服をきて逃げてきた被災者を見た。伯母は８日に鉄砲町にいる自分の妹（別の伯母）を探しに市内に入り、伯母と６ヶ月の赤ちゃんを南観音に連れて帰った。その後家族で田舎に避難した。鉄砲町にいた４歳の従姉妹は家の下敷きになり、焼け死んだ。戦争だけは絶対にやってはいけない。

23 日（金）　末政サダ子　（当時１１歳）

16 時 20 分～17 時 50 分

当時、大芝小学校の６年生。学校近くの文具店の前で被爆。建物の陰にいたために助かったが、校庭にいた友だちは大ヤケドをして亡くなった。自宅にいた母親は天窓から入ってきた閃光で半身を大ヤケドした。近くの公園で再会した母親の火傷に湧いたウジを舌で取ってあげた。これまで誰にも体験を語ったことはなかったが、福島原発事故による放射能被害の拡大をみて、自分の体験を語っておかないといけないと思うようになった。